

東大地震研究所・古村孝志教授に聞く - 大分のニュースなら 大分合同新聞プレミアムオンライン Gate



大分県内で観測史上最大となる震度6弱を記録するなど、熊本、大分両県で相次ぐ地震はいまだ終息する気配が見えない。地震はどうして起きたのか。今後どうなるのか―。東京大学地震研究所副所長の古村孝志教授(地震学)に聞いた。

―一連の地震はどのようにして起きたのか。

大分から熊本、長崎へと続く別府―島原地溝帯では、九州を南北に引っ張る力が常に働いている。地溝帯のへり(境目)には、別府―万年山をはじめとする断層帯が発達している。今回は熊本にある南側のへりで断層が横ずれした。一般的に内陸の地震は震源が浅いため断層が一気に壊れず、余震が多くなるが、今回は1日半置いて別の断層も動いたため、余震がものすごく多くなった。

―大分県を震源とする地震はどう見ればいいのか。

大分の地震は熊本で起きた地震が誘発したと考えている。地下では押されたり、引っ張られたりとさまざまな「応力」が働いている。熊本の地震により地盤の応力のバランスが崩れ、大分にも影響した。地震を引き起こす「ひずみ」がたまっていないと、応力の分布が変わっても地震はあまり起きない。大分ではもともと地震が起きかけていた可能性がある。

―今後の見通しは。

これで終わるか、他に起きるかは地下にひずみがどれだけたまっているのか見えないので分からない。

だが、国の地震調査研究推進本部によると、別府―万年山断層帯でマグニチュード6・7～7・5級の地震が30年以内に起きる確率は最大4%と全国でもかなり高い。断層が複雑な帯状に何本も走り、地震がどこまで大きくなるかは見通せない。新潟中越地震(2004年)の断層帯とよく似ている印象だ。

―愛媛県・伊方原発への影響は。

怖いのは伊方原発だ。今回の地震が別府湾を越えて国内最大級の活断層「中央構造線断層帯」に影響し、四国でも大きな地震が起きる可能性は否定できない。そうしたとき、安全に原発を停止できるかどうかは事前の想定や対応次第だ。

―南海トラフ地震との関連はあるか。

海底のプレート境界で起きる地震とは種類が違う。ただ、南海トラフ地震はいつか必ず起きるので警戒しなければいけない。経験則では、その30～40年前から、今回のように西日本で内陸の地震が活発化する傾向がある。

ふるむら・たかし 1963年生まれ。富山県出身。2000年に東大地震研入り。地震波の解析と伝わり方をコンピューターでシミュレーションし、大地震の発生メカニズムを分析している。日本地震学会副会長、内閣府南海トラフの巨大地震モデル検討会委員。

※この記事は、4月21日大分合同新聞朝刊3ページに掲載されています。